

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Deconstructing heroism : men and women in Tim O'Brien's works

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2001-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 篠田, 実紀, Shinoda, Miki メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/919

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ヒロイズムの脱構築

—— Tim O'Brien の作品における男と女

篠田実紀

序 “John Wayne Syndrome” と “Feminine Mystique”

アメリカ合衆国を超大国とした20世紀を振り返ると、1960年代後半から70年代は、この国の内外におけるひとつの大きな試練の時期であった。民主主義を共産主義から守るという大義のもとに軍事介入を行ったベトナム戦争の長期化、泥沼化に伴い、世紀の前半のふたつの世界大戦で打ち立てられた「強いアメリカ」のイメージは、ゆらぎつつあった。

ベトナム戦争までのアメリカ人のヒロイズムとは、絶対善である勇敢なアメリカ人が、卓越した技能と高尚な道義をもって悪をくじくというものであった (Gustainis, 23)。これは特に John Wayne に代表されるハリウッド映画などによって作り上げられたアメリカ人男性の理想像であり、その姿は同時に、国際社会におけるアメリカという国の象徴であると信じられていた。Tobey C. Herzog は、*Vietnam War Stories: Innocent Lost* (1992) の中で、このようなヒーロー神話を “John Wayne Syndrome” と名付け、次のように論じる。

The name of John Wayne was invoked as a verbal shorthand to describe the larger-than-life character of the American warrior-gentleman and to represent for young males the elements of manhood. (1992, 19)

“John Wayne Syndrome” というハリウッ德的ヒーロー幻想は、John F. Kennedy 大統領の New Frontier 政策と相俟って、ベトナム戦争の特に初期には多くの若者たちを志願兵として戦場に送った。Milton J. Bates が *The Wars We Took to Vietnam* (1996) で述べるとおり、当時のアメリカ人男性は戦争に行くことによって「男をあげる」(“build men”) のであり、戦争は「男らしさ」の究極の行為であると見なされており、兵士になった男たちは自らの中にある女性的なものを悉く排除するように訓練を受ける(140-41)。

しかし、特に1968年のテト攻勢の頃を転機に、戦況はアメリカ側に敗北の色を呈するようになる。強いアメリカの正義とヒーロー神話を信じて戦場に赴いた兵士たちは、明白な前線もないジャングルのゲリラ戦で姿の見えない狙撃兵の恐怖にさらされ、敵か味方か確認することもないまま解放戦線(Viet Cong) と疑われる者は老若男女を問わず殺し、村々を焼き払うという戦争の汚い現実を前に、自らの信念に欺かれたと感じるようになる。又、この戦争では、メディアが戦場の画像をアメリカの家庭に送り、戦争の実情のある程度の部分が、戦争に行かない一般市民の目にもふれるようになった。これらの画像が語る兵士たちの姿は、“warrior-gentleman” の John Wayne 的ヒロイズムとは程遠い、思慮のない残虐性、モラルの低下を露呈するものであった。ベトナム戦争は、このような既成のヒーロー像を次々と破壊するとともに、ヒーローとは、男らしさとは何かという疑問を投げ掛けることになる。更にはベトナム戦争そのものが、実際に戦うべき戦争なのか、アメリカと南ベトナムの民主主義が善で北ベトナムと解放戦線の共産主義が悪という大前提そのものが正しいのか、という疑問も生じ、アメリカがそれまで信じてきた価値観全体がゆらぐことになる。

男らしさの理想像が揺らぎ始め、男性がその真価を発揮する聖域であった戦争に大きな疑問が投げられたころ、アメリカでは、女らしさの概念と、女性の聖域であった家庭に対する価値観も転換期を迎えていた。Betty

Friedanは *The Feminine Mystique* (1963) の中で、結婚して家庭に入り、夫と子供のために尽くすのが女性としての究極の幸せであり、女らしさの成就 (“feminine fulfillment”) であるという、第2次大戦以降のアメリカの白人中流家庭を支配していた価値観を “feminine mystique” と名づけ、このような幻想を信じて家庭に入り、郊外の家で物質的には何不自由ない生活を送る主婦たちが、“feminine fulfillment” を感じるどころか、自己を見失い、空虚な気分で日々を過ごしているという現実を、様々な角度から浮き彫りにし、女性は夫や子供のために生きるのではなく、人間として社会的に自立した個人としてのアイデンティティを確立しなければならないと説いた。Friedanは National Organization for Women (NOW) を結成し、以後女性解放運動は、公民権運動とも連動しながら人種や性による差別撤廃へと活動を進め、ベトナム反戦運動とも結びついてゆく。

I. Tim O'Brien の内的葛藤

このような女性解放運動・公民権運動・ベトナム反戦運動が高まり、前時代的アメリカの価値観が大いなる転換を迫られつつあった1968年、大学を卒業したばかりの Tim O'Brien は、ベトナム戦争に徴兵された。このころ O'Brien は、アメリカのベトナムへの軍事介入には否定的であり、この戦争が誤った戦争であるという考えを持っていた。自らの作品やインタビューの中で何度も語るとおり、彼は徴兵を忌避してスウェーデンやカナダへ逃亡することを企てるが、結局は意に反して戦場へ赴くことになる。復員後、O'Brien は、*If I Die in a Combat Zone* (1973) で作家としてデビューし、*Going After Cacciato* (1978)、*The Things They Carried* (1990) など、主としてベトナム戦争を舞台とした作品により、ベトナム戦争文学の第一人者としての名声を得る。

作家となったベトナム戦争復員兵は少なくない。しかし、Tim O'Brien が Ron Kovic や Philip Caputo など他の作家たちと大きく異なるのは、後

者の作家達が、Herzogの言う“John Wayne Syndrome”にとりつかれ、戦争の正当性を信じて祖国のために戦った揚句アメリカに幻滅したのに対し、O'Brienの場合ははじめから戦争の正当性を否定しながら戦ったという点である。大学に入るまでのO'Brienは、Kovic同様Audie MurphyやJohn Wayneの映画に憧れ、John F.Kennedyをヒーローと仰いだ(Herzog, 1997, 5-6)。しかし、Macalaster College入学後の彼は、急進的ではないがベトナム戦争反対派となり、反対派の政治家Eugene McCarthyを支持し、政治運動に加わることもあった(Herzog, 1997, 11-12)。従って、徴兵された1968年の時点において彼は、MurphyやWayneの映画に憧れた少年の夢を愛国心と直結させて何の迷いもなく海兵隊に志願したRon Kovicほどのナイーブさは持ち合わせていなかった。にもかかわらず、自己の信念に従って戦争に行かないという選択肢を採ることができなかった。即ち、KovicやCaputoの内的葛藤は、主として戦闘中や復員後に始まるが、O'Brienは、召集令状を受けとった瞬間から、現実の戦闘と、自己の内的葛藤という、二重の戦いを強いられることになる。ノンフィクションの回想録*If I Die in a Combat Zone*の中で語っているように、彼は訓練に加わる当初からこの戦争を否定しており(“Escape”), 彼の戦いはベトナムに行く前から始まっていた。

客観的に冷静に考えてどうしても誤っていると思われる戦争に彼が行ってしまった理由の最大のものは、彼の作品に表れるように、徴兵を忌避した場合に想定される、故郷ミネソタのコミュニティからの非難の目と、それによる“embarrassment”を恐れた故と考えられる。たとえば回想録*If I Die in a Combat Zone*では、そのころの自己を振り返り、次のように反省する。

I did not want to be a soldier, not even an observer to war. But neither did I want to upset a peculiar balance between the order I knew, the people I knew, and my own private world. It was not

that I valued that order. But I feared its opposite, inevitable chaos, censure, embarrassment, the end of everything that had happened in my life, the end of it all. (32)

Going After Cacciato の主人公 Paul Berlin は言う。

I am afraid of running away. I am afraid of exile. I fear what might be thought of me by those I love. I fear the loss of their respect. I fear the loss of my own reputation. Reputation, as read in the eyes of my father and mother, the people in my hometown, my friends. I fear being an outcast. I fear being thought of as a coward. I fear that even more than cowardice itself. (286)

又、作者にきわめて近接した存在である *The Things They Carried* の語り手 Tim O'Brien は、“On the Rainy River” の中で、告白する。¹

All those eyes on me—the town, the whole universe—and I couldn't risk embarrassment. It was as if there were an audience to my life, that swirl of faces along the river and in my head I could hear people screaming at me. Traitor! They yelled. Turncoat! Pussy! I felt myself blush.... It had nothing to do with morality. Embarrassment, that's all it was.” (61-62)

“John Wayne Syndrome” に染まっていたわけではないが、“pussy” と呼ばれることには堪え難かった O'Brien は、やはり前時代的ヒーロー神話から完全に解放されていたとはいえない。“On the Rainy River” の語り手は、自己の信条に反して戦争に赴いた自分を、“coward” と呼ぶ (63)。O'Brien は又、1994年 *The New York Times Magazine* に掲載されたエッセイ “The Vietnam in Me” の中でも、“I have written some of this

before, but I must write it again. I was a coward. I went to Vietnam.” とくり返す (52)。Tobey Herzog とのインタビューにおいても彼は、当時自己のとった選択を、“an act of unpardonable cowardice and evil” であると述べ、戦争に行ったことは “guilty” なことであると言っている (Herzog, 1997, 14)。このように、自分の対面保持と中途半端なヒロイズムの残骸から「まちがった戦争」に参加してしまった O'Brien は、復員後、Kovic のような作家の持つ戦場での体験に基づくトラウマと、自分が正しくないと信じていた戦争に参加してしまったというトラウマに、二重につきまわれ、自責の念に苛まれることになる。Mark A. Heberle が、“The implied paradox of being a coward by remaining a soldier... has been at the heart of O'Brien's self representations in all his works” (57) と指摘するとおり、O'Brien の作品では常に自己の意に反して戦地に赴いた「臆病な」兵士の内的葛藤があり、戦争に行くという行為と、間違った戦争には行かないという行為と、どちらが勇気ある行為なのかという問題を巡って、“courage” の概念が問われることになる。

II. 作品における女性達

ベトナム戦争を舞台とした O'Brien の代表作 *Going After Cacciato* と *The Things They Carried* では、従来の “courage” = “hero” = “soldier” = “masculinity” という価値観は常に疑問視される。当然のことながら、John Wayne 的 “warrior-gentleman” のヒーローは登場せず、出てくる兵士たちは一様に幼稚でナイーブで思慮に欠ける。そんな中で注目したいのは、この2作における女性の登場人物である。本論では、*Going After Cacciato* と *The Things They Carried* の女性たちにスポットライトを当て、これらの女性の登場人物たちが如何にして従来の “courage” の概念、ヒーロー神話を脱構築し、戦争文学というイメージを大きく塗り替える役割を果たしているかを考察する。

(1) *Going After Cacciato* の Sarkin Aung Wan

Going After Cacciato は、1978年、John Irving や John Cheever といった強敵を押し退け全米図書賞に輝いた。この小説は、ベトナム戦争が舞台となっており、中心となる物語は、パリへ向かって脱走した Cacciato という兵士を、彼の属する Third Squad が追跡するという奇想天外な筋であるが、そのメインストーリーの合間に、主人公で Third Squad の一兵士である Paul Berlin の現在の状況を語る “Observation Post” という短い章と、Paul の過去の記憶を語る章が何度も挿入されるという三重構造である。そして、メインストーリーである Third Squad のパリへの道行きは現実ではなく、実は observation post で見張りをしている Paul の imagination の産物であるということになっている。

この主人公の imagination の中の冒険に参加し、重要な役割を演ずるのがベトナム人難民の女性 Sarkin Aung Wan である。この登場人物は、二人のおばと共に2頭の水牛の引く車に乗って「西へ」逃れる中国系ベトナム人であり、Third Squad の Stink Harris が誤って1頭の水牛を撃ち殺してしまったことから、Cacciato を追う分隊の道行きに同行することになる。Renny Christopher は、*The Vien Nam War/The American War* (1995) の中で、O'Brien の Sarkin Aung Wan の描き方を、ベトナムという国や文化に対する知識を欠いたアメリカ人がアジア人女性に抱いている “clichés” の具現であると批判し、そのようにアメリカ兵がベトナム人を知ることができないのはアメリカ人の “ethnocentrism” と、アジア人を一様にステレオタイプ化する歴史の所以であるとする (232)。たしかに、Sarkin Aung Wan という名前そのものがベトナム人のものではあり得ず、彼女の考え方も性格も、あくまでもベトナムのことを何も知らないアメリカ人によって概念化されたステレオタイプであることは否めない²。しかし、Wan をベトナム人女性と限定せず、人種や性を超越した一個の登場人物として読むと、彼女は強烈な個性を持ったユニークな人物である。

Wan は主人公 Paul Berlin のガールフレンド的存在となり、物語の終末近くには彼とパリのアパートに住むことになるのだが、ハリウッドの戦争映画に花をそえる、強いヒーローに憧れ彼に愛され保護されるか弱き女性という、周辺の受動的「いろどり」に甘んじてはいない。パリのアパートに落ち着くのも束の間、彼女と Paul は Majestic Hotel でパリ平和会議の席につき、意見を戦わせることになる。このとき、彼女は、戦争から逃れたいという Paul の消極的願望をきわめて積極的な形で代弁し、戦争に背を向けることは、卑怯でも臆病でもなく、人道にかなった平和的原理を実践する勇氣ある行為だと説く。

“...Spec Four Paul Berlin, I urge you to act.... Do not be frightened by ridicule or censure or embarrassment, do not fear name-calling, do not fear the scorn of others. For what is true obligation? Is it not the obligation to pursue a life at peace with itself?... And now it is time for a final act of courage. I urge you: March proudly into your own dream.” (284)

彼女は、Paul の既成の「男性」概念に縛られたヒロイズム、“courage” の概念を根本的に覆す逆概念をつきつける。Wan の価値観を認めつつ、上述したように、最終的に Paul は、周りの人間への体面を気にするあまり、戦線を離脱して彼女とともにパリのアパートに落ち着くという「勇氣」を奮い起こすには至らない。しかし、O'Brien がインタビューの中で認めるように、ヒーロー不在のこの小説の中で、臆病で“heroic” ではない主人公を常にリードしていく Wan は、“a strength of endurance that belies her physical fragility” の持ち主であり、“an example of a hero” である (McNerney, 21)。このように、*Going After Cacciato* は、Sarkin Aung Wan という「ヒロイックな」女性と対象させることにより、Paul Berlin

の臆病さをきわだたせ、従来のヒロイズムに大きな疑問を投じる。

(2) *The Things They Carried*の女性たち

*The Things They Carried*は、ベトナム戦争を題材とし、戦争を主要な舞台としているにもかかわらず、戦争文学というイメージからは掛け離れた印象を与える作品である。

まず注目すべきは、この作品が、O'Brienの戦争体験後20年という長い年月を経て書かれたという点である。ここでは戦時中と戦後の場面が交錯するが、自己は43才であると幾度となくくり返す中年の語り手がスタンスを置く時点は一貫して、戦時のベトナムではなく戦後20年後の平時のアメリカであり、その「外側」の視点から醒めた眼で過去を振り返る。従って、中心となるのは、戦時中の自分を含む兵士たちの幼稚でナイーブで、徹頭徹尾いわゆる「ヒロイック」ではない姿と、戦後のエピソードであり、戦争ものにつきものの派手な戦闘シーンはほとんど見られない。又、戦争ものの例にもれず、Ted Lavender, Lee Strunk, Curt Lemon, Kiowa, そして語り手が殺した（と言いながらのちにそうではないと否定する）ベトナム人兵士、といった兵士の死の場面は少なからずあるが、いわゆる「ヒロイックな」死や、「強いヒーロー」が「悪人」を殺すというハリウッド的に理想化された死のシーンはひとつもない。

この作品の戦争文学らしくない点は、女性の登場人物の取り扱い方においても指摘される。*The Things They Carried*には、*Going After Cacciato*のSarkin Aung Wanのように全編に一貫したひとりの女性が登場するわけではないが、女性は多く登場し、しかも作品の要所要所で重要な役割を果たす。全体的な構成としても、まず冒頭でAlpha Companyの隊長Jimmy Crossの愛する女性Marthaを彼のimaginationの中で登場させ、語り手Tim O'Brienの幼少期(Timmy)のガールフレンドLindaとのエピソードで全編を締めくくるという構成になっており、女性の話で始まり女性の話で

終わるといふ、戦争文学としてはきわめて異例の形をとっている。しかも、冒頭の“The Things They Carried”も最後の“The Lives of the Dead”も、共に男性が女性を映画に誘い、映画を見たあと女性の家まで送りどけるといふ、アメリカの伝統的なデートのエピソードが登場するが、“The Things They Carried”ではJimmy CrossのMarthaへの恋は肉体的関係に至ることはなく、“The Lives of the Dead”ではLindaはまもなく9才で死んでしまうので、双方とも男性から女性への恋が成就することなく終わってしまう。

*Going After Cacciato*のWanが、Paul Berlinの想像上の世界という限定を受けつつも終始メインストーリーにincludeされていたのに対し、*The Things They Carried*に登場する女性たちは“Sweetheart of the Song Tra Bong”のMary Anne Bellと“Style”のベトナム人の少女を除き、すべて戦場の「外側」におり、excludeされている。

Lorrie N. Smithは、“‘The Things Men Do’; The Gendered Subtext in Tim O’Brien’s *Esquire* Stories” (1994)の中で、*The Things They Carried*は、多くのベトナム戦争復員兵の作品同様、女性の登場人物を「周縁的」(“marginal”)な存在としてしか描かないことにより、戦争に参加していない者、特に女性を排除しようとしていると述べる。Smithは、Susan Jeffordsが*The Remasculinization of America: Gender and the Vietnam War* (1989)の中でベトナム戦争映画や文学によるアメリカの“masculinity,” “patriarchy”の復活を危惧した路線を受け、Jeffordsの言う“remasculinization of America”の傾向がO’Brienの作品にも見られると指摘する。確かに、Ronald Reagan, George Bushの共和党政権下にあった80年代のアメリカには、60-70年代の反動もあって、50年代的な「強いアメリカ」の復活の機運があり、Jeffordsの批評が出た翌年(即ち*The Things They Carried*が出版された年)には湾岸戦争が勃発し、アメリカ主導の多国籍軍は一応の勝利を見た。しかし、Jeffordsが問題視するのは、

主として *Rambo* シリーズに代表される80年代の映画であり、彼女の説を *The Things They Carried* に応用するのは若干の無理がある。*The Things They Carried* は、Jeffords の本の1年後に発表されたので *The Remasculinization of America* で取り扱われることはないが、それ以前のO'Brien の作品に関しても、Jeffords 自身はほとんど取り上げていない。Kali Tal はのちに *Worlds of Hurt: Reading the Literature of Trauma* (1996) の中で、ジェンダーという新しい視点を導入することによってベトナム戦争文学理解を深めたという点で *The Remasculinization of America* を高く評価するものの、Jeffords の批評は、文学作品や映画、テレビ番組などすべてのベトナム戦争ものを十束ひとからげ的に論じ、それらの作品の背後にいるベトナム戦争復員兵を、ジェンダーというより大きな問題の単なる“representations”として取り扱い、復員兵の個々人に眼を向けてはいないため、戦争というものが比喩としてしか語られない、という限界を指摘する(70)。ベトナム戦争文学という大枠をはずして、作者としての一復員兵 Tim O'Brien に眼を向けてみると、彼の作品の主調は、終始一貫して50年代80年代型ヒロイズムに挑戦するものであり、決して女性を排除し、兵士たちの“masculinity”を賛美するという Jeffords の一般化に与するものではない。

80年代に発表されたO'Brien の *The Nuclear Age* (1985) は、直接ベトナム戦争を取り扱っていないせいもあってか、Jeffords にはとりあげられていない。*Going After Cacciato*, *The Things They Carried* という2大傑作には含まれたこの小説は、概して不評であった。その理由のひとつとして、ベトナム戦争の徴兵忌避者を主人公とするこの小説全体があまりに60年代70年代的であったということが考えられる。あらゆる政治的圧力から「逃れ」、来るべき核戦争に備えてひたすら穴を掘る主人公 William Cowling は、「強いアメリカ」復活の80年の読者には魅力に乏しかったのではないか。O'Brien 自身は、周囲から受ける“embarrassment”や“censure”に屈す

ることなく自己の信念に従って戦争に背を向ける Cowling こそは, “courageous” であり, “To me, he’s the only hero I’ve written.” と語る (Naparsteck, 5)。O’Brien にとってのヒロイズムは, 戦争に行くか行かないかという次元のことではなく, 自己の良心に従うか否かということに関わってくる。

What is a hero? What I mean by a hero is someone who behaves in a way that corresponds with his or her beliefs.... Heroism is not determined by outside criteria; it’s determined by criteria inside one’s own psyche, one’s own conscience. (McNerney, 11)

以上のことから, Jeffords の論を *The Things They Carried* に適用する Smith の論は短絡的であると考えられる。

O’Brien の作品が, 女性をはじめ戦争を体験できない者を部外者として “exclude” するという, Smith のような指摘に対しては, O’Brien は全くその逆であると反論する。

The joy is not the joy of touching veterans or touching people who have lived what you have lived. The joy is just the opposite. Maybe that’s what hurts me when I hear that articles are being written by women saying I am anti-feminist. The whole creative joy is to touch the hearts of people whose hearts otherwise wouldn’t be touched. (McNerney, 25)

The Things They Carried の女性たちは, 決して周辺的な存在ではなく, 前述のようにヒロイズムの概念に疑問を投げ掛けるとともに, 戦争の外側にあつて戦争を体験していない者の心をつかむという重要な役割をも担っている。

a) Martha

冒頭の “The Things They Carried” 及び “Love” で Jimmy Cross の imagination の中に登場する Martha は、徹底的に戦争と無縁の外的存在としての女性である。Mount Sebastian 大学で英文学を専攻し、Chaucer と Virginia Woolf を愛好する彼女は、自らも詩的感性を持ち、高潮になると海と陸が接するところで拾った小石を、“separate-but-together quality” という、自分の Jimmy への感情を象徴するお守りとして贈る。Jimmy Cross は、そんな Martha を愛し、性的に結ばれたいと感じているが、戦争に行く前に一度 *Bonnie and Clyde* の映画を見ながら彼女の膝に触れたものの拒否され、その後も彼女への叶わぬ性的欲望としての “love” を抱いたまま戦争に参加し、彼女の写真と手紙と小石を持ち歩き、Alpha Company の隊長としての任務を遂行しながら、imagination の中で Martha と浜辺を散歩する。

On occasion he would yell at his men to spread out the column, to keep their eyes open, but then he would slip away into daydreams, just pretending, walking barefoot along the Jersey shore, with Martha, carrying nothing. He would feel himself rising. Sun and waves and gentle winds, all love and lightness.
(10)

Jimmy は、Martha の写真を 2 枚携帯している。1 枚はたぶん彼以外の男性が撮ったと彼が推測するスナップショットで、もう一枚は Mount Sebastian yearbook から切り取ったバレーボールのアクションショットである。前者には Martha が “Love” とサインしているが、“though he knew better” とあるように、このサインは、彼女の手紙における “Love” 同様、Jimmy の求める性的な意味での “love” ではない。また、“gray and

neutral”と形容される彼女の眼は、手紙の中でも“Jimmy, take care of yourself”と言う以外戦争に言及することなく、黒白を決する戦いに“involve”されることのない中立の別世界に身を置き続ける彼女の姿勢を象徴する。後者の写真では、Marthaは“white gym shorts”をはいてバレーボールをしているが、Marthaと肉体的に結ばれることを望むJimmyにとって、この写真は、“Her legs, he thought, were almost certainly the legs of a virgin, dry and without hair...”などとMarthaに関する唯一性的な想像を喚起できるものである(6-7)。

上述したとおり、*The Things They Carried*は、文学を愛好する物静かな女子大生Marthaを冒頭に登場させることによって、戦闘シーンや兵士たちの描写という一般的な戦争文学の冒頭を期待する読者には意外な印象を与える。“First Lieutenant”, “rucksack”, “foxhole”, “canteen”, “She never mentioned the war”などの表現から、場面が戦場であり、Jimmy Crossが兵士だということはわかるが、文章の主なトーンはJimmyのMarthaへの“love”と、彼女からも同じように愛されたいという欲望である。戦争ものとは信じ難いまでの情緒的な描き方である。次のページでは、一転して、戦場で兵士たちが重い荷物をかついで行軍するきびしい現実が、兵士の持ち物を単調に無機的にならべたてる対照的な描き方となる。

“The Things They Carried”の前半では、このような、MarthaにまつわるJimmy Crossのimaginationの世界の叙情的描写と現実のAlpha Companyの行軍の単調な語りが対照的に交錯する。汗と泥にまみれて重い荷物を背負って歩く兵士たちの姿は、写真の中で“white gym shorts”をはいてバレーボールをするMarthaの身軽で清潔な姿と対照され、兵士たちの持ち物(“the things they carried”)を無機的に淡々と数え上げる硬質な語りは、Jimmy CrossがMarthaのことを追憶し、彼女への叶わぬ恋を思い悩み、彼女と愛し合うことを“pretend”するimaginationの場面の情緒的文学的劇的な語りと対照される。このように二極に分裂した語りは、戦

争の現実に集中しようとしながらも無意識に愛する女性のことを考えてしまい、それに気付いてまた現実の世界に意識をもどそうとする Jimmy の心の揺れを反映する。そして、カタログのように持ち物を無機的に並べ立てる語りが象徴するように、Jimmy の意識は、現実に集中しようとしても、Martha への想いが強いあまりに集中できず、現実が却って非現実に映り、兵士たちの動きも機械的に感じられてしまう。

ところが、Jimmy Cross が Martha に想いを馳せているときに部下の Ted Lavender が狙撃されて命を落としてしまう (13)。Lavender の死の描写を境に、後半の語りは変化し、前半ほどの明確な二極分裂はせず、Jimmy の内面描写と現実の描写は渾然と現れるようになる。この語りは、それまで現実から離れていた Jimmy の気持ちが、Ted Lavender の死によって現実にひきもどされたことを反映していると言えるだろう。Jimmy の内面描写は依然として続くものの、Martha に関するロマンティックな imagination の世界は姿を消し、代わって自分が Martha のことを考えて注意力散漫となったために部下を死なせてしまったという後悔の念と、自分の戦争任務遂行を妨げる者として Martha を排除しようとし、彼女は自分とは別世界の人間なのだと自分に言い聞かせる気持ちが語られ、より現実に直結したものとなる。

He hated her. Yes, he did. He hated her. Love, too, but it was a hard, hating kind of love. . . .

No more fantasies, he told himself.

Henceforth, when he thought about Martha, it would be only to think that she belonged elsewhere. He would shut down the daydreams. This was not Mount Sebastian, it was another world, where there were no pretty poems or mid-term exams, a place where men died because of carelessness and gross stupidity. (23-24)

Jimmy は、自己のある意味で “feminine” な空想癖を責め、Martha の手紙や写真を燃やし、Martha という女性を部外者ないしは邪魔者として戦場から排除しようとする。

このような Jimmy Cross の心境をうつした語りについて、Lorrie Smith は、次のようにコメントする。

But the story also establishes an inexorable equation: imagination = women = distraction = danger = death. The story's dramatic resolution turns on recovering masculine power by suppressing femininity in both female and male characters. Survival itself depends on excluding women from the masculine bond. In this first story, the renunciation of femininity is a sad but necessary cost of war, admitted only after real emotional struggle. It establishes a pattern, however, for the rest of the book. (24)

そのうえで、Smith は、imagination も、Martha への “love” も、“feminine” なものはすべて排して兵士としての任務遂行を選ぶ Jimmy Cross の最終的な決断と、その決断を “necessary” であるとする語りに対し、“The Things They Carried” もまた、男性としての兵士たちを救済し、“femininity” を周辺に追いやるものであると結論づける (27)。

確かに、Martha は、手紙の中でも戦争に言及することはなく、頑に自己を戦争に “involve” されることを拒む周辺的な「外側」の存在として描かれる。そして、Martha の描写から “feminine” な調子で始まった “The Things They Carried” は、“Lieutenant Jimmy Cross reminded himself that his obligation was not to be loved but to lead” (25) と、Jimmy の Martha への恋慕への決別を物語り、現実の戦争における隊長としての任務遂行の意志を示すという、“masculine” な終り方をする。しかし、Jimmy Cross が “femininity” を周辺に追いやろうとする姿勢を、作品の

語り手ひいては作者の姿勢と同一視するのは性急ではないだろうか。

“The Things They Carried”においては語り手がだれであるか、まだ identify されない。従って、この作品を独立したひとつの短編小説として読むならば、ちょうど Paul Berlin を主人公とする *Going After Cacciato* と同じように、この話は、夢想家兵士 Jimmy Cross を主人公とする三人称語りの作品として読むことができる。しかし、*The Things They Carried* 全体を通して見ると、Jimmy Cross は、重要な登場人物の一人ではあるが、主人公ではないことがわかる。更に、“The Things They Carried”に続く“Love”では一人称の語り手が登場し、次の“Spin”でその語り手が作者と同名の“Tim O’Brien”であることがわかる(39, 40)。更にこの語り手は、語り手に終始することなく、Alpha Company の一兵卒という、登場人物の一人でもある。Jimmy Cross と語り手 Tim O’Brien は、同じ中隊の同世代の戦友として共通する点はあるが、完全に別個の人格をもった独立した登場人物である。また、前述のように、語り手は、43才のベトナム戦争復員兵といふかなり距離を置いた視点から戦時中の Jimmy Cross の描写をしているということも考慮しておかなければならない。

“Love”は、戦後何年も経って Jimmy Cross が語り手を訪れ、ジンを飲み交わしながら戦争中のことを振り返るといふ設定になっている。ここで Jimmy は、語り手 O’Brien に、復員後彼は大学の同窓会でルター派の宣教師として第三世界を廻る Martha と再会したと語る。そして、大学時代 *Bonnie and Clyde* の映画を見た夜、もう少しで“something very brave”をするところだった、即ち彼女と肉体関係を持つところだった、と彼女にほめかしたところ、彼女の反応は次のようなものだったと Jimmy は話す。

Martha shut her eyes. She crossed her arms at her chest, as if suddenly cold, rocking slightly, then after a time she looked at him and said she was glad he hadn't tried it. She didn't

understand how men could do those things. What things? He asked, and Martha said, The things men do. (31)

翌朝、彼女は Jimmy が燃やしてしまったバレーボールの写真と同じものを彼に渡し、もう燃やさないでと言った、と Jimmy は語り、"It doesn't matter... I love her." と付け加える。別れ際に語り手 O'Brien が Jimmy のことを題材にした物語を書きたいと言うと、Jimmy は "Maybe she'll read it and come begging. There's always hope, right?" と言う。最後に、Jimmy は O'Brien に物語の書き方について、自分を John Wayne 的ヒーローに描くよう、注文をつける。

"Make me out to be a good guy, okay? Brave and handsome, all that stuff. Best platoon leader ever." He hesitated for a second.

"And do me a favor. Don't mention anything about—"

"No," I said, "I won't." (31)

戦後年月を経ても、この復員兵はある種の "John Wayne Syndrome" をひきずっているように思われる。

このことを念頭において今一度 "The Things They Carried" を読むと、語り手は必ずしも Jimmy の注文には従わなかったということがわかる。"The Things They Carried" の語り手が描く Jimmy Cross は、"Brave" でも "Best platoon leader" でもなく、戦争に集中できない夢想家の中隊長であり、そんな彼のことを43才の語り手は、"He was just a kid at war, in love. He was twenty-four years old. He couldn't help it." とコメントする (13)。Jimmy は "Love" の末尾で "Don't mention anything about—" と言い淀んでいるが、彼が語り手に言ってほしくないこととは、"a good guy", "Brave and handsome", "Best platoon leader" とは逆

の姿、即ち彼の Martha に対するセクシュアルな想像や、その想像のさなかに Lavender が撃たれたというような事実であるという類推が可能である。だとすれば、語り手は “No...I won't” と答えておきながら、Jimmy の要求を完全に裏切ったことになる。また、前述のように、たしかに Jimmy は Ted Lavender の死後一転して、Martha のことなど考えずに “Best platoon leader” としての任務に徹することを決意するが、この変化はあまりに唐突であり、語り全体に照らしても不自然である。

後半の語りでは、前半から引き続き兵士たちの持ち物に関する記述があるが、前半では物質的な持ち物が中心にカタログのように羅列されていたのと同様に、後半では精神的重荷の描写が中心となる。

They carried all the emotional baggage of men who might die. Grief, terror, love, longing—these were intangibles, but the intangibles had their own mass and specific gravity, they had tangible weight. They carried shameful memories. They carried the common secret of cowardice barely restrained, the instinct to run or freeze or hide, and in many respects this was the heaviest burden of all, for it could never be put down, it required perfect balance and perfect posture. They carried their reputations. They carried the soldier's greatest fear, which was the fear of blushing. Men killed, and died, because they were embarrassed not to. It was what had brought them to the war in the first place, nothing positive, no dreams of glory or honor, just to avoid the blush of dishonor.... It was not courage, exactly; the object was not valor. Rather, they were too frightened to be cowards. (20-21)

上でも見たとおり、*The Things They Carried* のみならず Tim O'Brien の作品すべてに通底するテーマのひとつに、“courage” と “cowardice” の問題がある。O'Brien 文学では、他人から “coward” と呼ばれたくないため

に戦争に行き、だだだらと戦争を続けることこそが臆病な行為であり、誤った戦争に対して非難を恐れることなく背を向けることの方が真の勇氣ある行為である。このような文脈の中では、今後は女のことなど考えず戦争に集中しようという Jimmy の決意は、隊長としての自覚というよりは、むしろ、女のことを想像していた自分を “coward” と思われたくないという “fear of blushing” から出た空勇氣に聴こえてしまう。

語り手の Jimmy Cross の描き方を考えるために、Jimmy のヒーロー幻想が再び挫折する、“In the Field” に眼を転じてみよう。“In the Field” は、Alpha Company が村人たちが共同便所として利用している湿地に野営中、大雨の中迫撃砲の攻撃を受け、排泄物の泥沼に沈んだ Native American の兵士 Kiowa の遺体捜索の話であるが、ここにおいても Jimmy Cross は、隊長として不適切な野営場所を選んだために部下が死んだという自責の念をもつことになる。

A crime, Jimmy Cross thought.

Looking out toward the river, he knew for a fact that he had made a mistake setting up here. The order had come from higher, true, but still he should've exercised some field discretion. (187)

この話の中でも、“The Things They Carried” と同様の Jimmy の内面描写が時々現れる。その中で彼は、自分の誤った選択を責め、死んだ Kiowa の父親にあてて隊長として何か手紙を書こうと頭の中であれこれと文面を考えようとするが、一見すると責任感ある隊長としてのある種のヒロイズムと読める Jimmy の意識の流れはしばしば中断される。中断するもののひとつは、“The Things They Carried” 同様の彼の imagination であり、彼の心はここでも現実の戦場を離れ、故郷 New Jersey のゴルフコースという、“a world without responsibility” をさまよう (189-190, 199)。更に、43才

の醒めた語り手は、潔く過ちを認めて反省することによって何とかしてよき中隊長であろうと自分に言い聞かせる Jimmy の限界を見すかす。

Jimmy Cross did not want the responsibility of leading these men. He had never wanted it. In his sophomore year at Mount Sebastian College he had signed up for the Reserve Officer Training Corps without much thought. An automatic thing: because his friends had joined, and because it was worth a few credits, and because it seemed preferable to letting the draft take him. He was unprepared. Twenty-four years old and his heart wasn't in it. (190)

語り手は、Jimmy が、内面でどのようなヒロイズムを幻想しようと、彼自身が John Wayne 的ヒーローにはなり得ず、*Going After Cacciato* の Paul Berlin と同様に確固たる信念もないまま状況に流されて志願し、“unprepared” なまま成りゆき上責任を負う立場になっただけだという事実を暴露する。

“In the Field” に関して今一つ指摘しておくべき点は、Kiowa を失う原因となった迫撃砲攻撃に対する “the young soldier” の関与のしかたである。Jimmy がどうしてもその名前を思い出すことのできないこの兵士は、夜営のテントの中で自分のガールフレンドの写真を Kiowa に見せようとして懐中電灯を灯し、その光が敵の標的となったのである。彼もまた、Jimmy Cross と同様に自分を責めているように見える。しかし、彼が排泄物のぬかるみの中で懸命に Kiowa の遺体を探していると思った Jimmy Cross は、実はこの少年が探しているのは Kiowa ではなく、砲撃の中で失った、ガールフレンドの写真だということを知る。会話は次のように続く。

Jimmy Cross smiled at the boy. “You can ask her for another

one. A better one.”

“She won’t *send* another one. She’s not even my *girl* anymore, she won’t... Man, I got to find it. (194)

ここで読者は、“The Things They Carried”でMarthaの写真を持ち歩いていたJimmy Cross自身のこととそれにまつわるエピソードを思い出す。ガールフレンドの写真という接点から、Jimmyと“the young soldier”の距離は限り無く縮まることになる。ここでも、語り手は、責任感のある中隊長であろうとするJimmy Crossに、この若い兵士と同じ幼稚さを共有する単なる“boy”のイメージをだぶらせる。

ここで、話を再び“The Things They Carried”と“Love”にもどし、JimmyとMarthaの“love”の概念のずれについて考察する。ある意味でこの二人は互いに相手を愛しているのだが、愛し方が異なる。Marthaの愛は、浜辺で拾った小石に託した“separate-but-together quality”という彼女自身の言葉が物語るように、肉体は離れていてもお互いの存在を感じることができるような、性を超越した個人対個人の精神的な結びつきであるのに対し、Jimmyにとっての“love”とは、贈られた小石を口に含み、手紙の封のところを舐めてみるといった肉体的な愛であり、お互いの肉体が触れ合うことによるのみ成就するものであるので、“separate-but-together quality”など、自分の「愛」を巧みにかわす美辞麗句にすぎないと感じる。Jimmyの愛は、彼のヒーロー幻想と連動する。強い男性が支配し弱い女性が従属するという旧来の性原理に縛られた感覚であり、そのことは、彼が責任感のある強きよき中隊長として戦争を続行しようとする“John Wayne Syndrome”的な考え方に裏打ちされる。

“Love”に見られるように、Jimmyのヒーロー幻想は時を経ても変化することなく、自分をモデルにした物語が自分を“Brave and handsome, all that stuff. Best platoon leader ever.”として描けば、それを讀んだ

Marthaはその強さに惹かれて自分のところに戻ってくるかもしれないだろう、というあたりは、彼の恋愛感覚もまた変わっていないということがわかる。“Love”でMarthaが理解できないという“The things men do”(13)とは、肉体的な力に勝る男性による女性の支配であり、ひいては武力によって強きが弱きを挫く戦争である。征服者は自らを“brave”と讃えるが、被征服者にとって征服者の行為は、相手への人道的思い遣りを欠いた自己満足な暴力にすぎない。Marthaが結婚することなく、貧困に苦しむ第三世界の人々を救う宣教師という道を選ぶのは、同じ第三世界で苦しむ人々の命を奪う兵士というJimmyの選択への挑戦であるともいえる。また、戦争中にJimmyが燃やした2枚の写真のうち、Marthaがスナップショットではなくバレーボールの写真の方を彼に渡したのは、いつまでも肉欲に執着し、男性が女性を肉体的に支配するという基準をもってしか“love”を感じることをできない彼に対する彼女の幻滅を表しているように思われる。

このように読むと、“The Things They Carried”でのMarthaの役割は、単なる周辺的なものではなく、*The Things They Carried*全体が提起する真の“courage”とは何かという問題に大きく関与すると考えられる。Jimmyの行為は、既成のヒロイズムの域内では“brave”であっても、自らの確固たる信念に基づいて行動する“courageous”な行為とは言えない。それに対しMarthaは、手紙の中においてさえ戦争のことを語らず、戦争にinvolveされるのを頑に拒むことによって、戦争に志願し、戦争を続行するJimmyを暗黙のうちに責めている。そして、如何なる幻想にも惑わされることなく、最後までJimmyに妥協せず自己の意志を貫いて宣教師となった彼女の行為の方が“courageous”と評価されるべきであろう。この点において、彼女もまた、*Going After Cacciato*のSarkin Aung Wanと同様、ある種の“hero”であるといえる。しかし、MarthaがWanと異なるのは、後者がベトナム人であり、戦争の「内側」にinvolveされ、常にPaul Berlinと行動を共にするのに対し、前者はアメリカ人であり、終始戦争の「外側」

であるアメリカ合衆国に身を置いているということである。また、aggressiveともいえる感情的な言葉で Paul を戦争から引き離そうとする Wan とは異なり、Martha は、戦争について語ることなく、常に冷静な “gray and neutral” な眼差しで客観的に Jimmy を見据える。ベトナム戦争に参加しないアメリカ人の読者にとって、Sarkin Aung Wan は、どこかalienな存在に感じられ、*Going After Cacciato* は強いインパクトを持つもののあくまでも戦場の話として、それを体験したことのない読者との距離をつくってしまう。しかし、“The Things They Carried” の作者 O’Brien は、Martha を、あえて Jimmy との間に距離を置いて戦場から exclude し、戦争の直接体験者でない読者の側に据えることにより、これらの読者と作品との距離を縮めている。そして Martha の距離と中立な眼差しは、戦後20年を経た作者が、この作品の中で、一兵士としてではなく一人のアメリカ人として、今一度読者と共に戦争について冷静に考えようという、方向性を示唆するものでもある。

b) Mary Anne Bell

“Sweetheart of the Song Tra Bong” で、Alpha Company の衛生兵 Rat Kiley が自己の体験談として語る話の中に登場する女戦士 Mary Anne Bell は、*The Things They Carried* の中で唯一戦争の「内側」に involve されるアメリカ人女性である。Mary Anne は、Mark Fossie という衛生兵のガールフレンドであり、Mark によってベトナムに呼び寄せられるが、徐々にベトナム戦争に魅了され、Mark から離れて Green Berets の戦闘に加わり、最後には Green Berets のもとも離れてジャングルに入って帰らなくなる。男性からちやほやされる性的魅力を持った女性でありながら「戦い」という男性の領域に入っていくという点で彼女は、*The Nuclear Age* の元チャリーダーの女テロリスト Sarah Strouch の系図を引く登場人物であるといえる。

Mary Anne Bell は、もともとは兵士となるためにベトナムに来たのではない。戦場とはいえ大した戦闘もなく、比較的平和ではあるが単調な毎日だれてきた Mark が、その生活に活気を与えるために彼女を呼び寄せたのである。高校を卒業したばかりの17才の彼女は、スーツケースと化粧箱を手に、白いキュロットスカートとセクシーなピンクのセーターという、およそ場違いな姿で戦場にあらわれる。彼女は白人女性としてはきわめて魅力的であり、Mark の仲間の衛生兵たちは、初めは手を取り合ってみつめ合う仲睦まじいカップルに羨望の念を覚え苛立つが、やがて彼女は兵士たちのアイドル的チアリーダー的存在となり、退屈だった彼らの生活に活力を与え、士気を高めることになる。彼女は、男性たちを喜ばせる一種のセックスシンボルとして兵士たちの崇拜の対象となる。内面的には、彼女は、子供のころからのボーイフレンドの Mark と結婚し、Lake Erie の畔の家に住み、3人の子供を作り、共に年をとって同じ棺に葬られようという夢を見ている。Milton Bates の指摘どおり、ここまでの彼女は、“the quintessence of American femininity as defined in 1960s mainstream culture” であり、愛する男性と結婚し、家庭に入って子供を育てたいという彼女の夢は“feminine mystique” にどっぷり漬かっている (155)。彼女と Mark は、“The Things They Carried” の Jimmy Cross が Martha に抱いていたような肉体的な“love” で結ばれており、互いの肉体に触れ合うことによって愛を確認し合っている。もともと Mary Anne が Mark の性的欲求の充足を目的とした誘いに応じてベトナムに来たのは、単なる好奇心からと、自分の愛する人が参加している戦争の現実に対する知識も認識も全くないまま、ただ“feminine mystique” を無批判に受け入れ、Mark の近くに行って彼に性的に支配される受動的存在になることを望んだという理由からである。

しかし、好奇心の強い Mary Anne は、やがて“feminine mystique” からベトナムの地と戦場の現実に見え隠れするようになり、変貌していく。彼女は、兵士たちから“our own little native” とからかわれながらも、南ベ

トナムの兵士たちと時間を過ごし、そのうち「相手チームのロッカールームを訪れるチアリーダーのように」(107)、Viet Congがいるかもしれない附近の村を訪れ、村人と交流するようになり、ついには下着姿になって Tra Bong 川で泳ぐ。そんな恐れ知らずの彼女を見て、下士官の Eddie Diamond は、“D-cup guts, trainer-bra brains.” とあきれが、いつかは彼女も思い知るだろうと危惧する(108)。彼女はまた、衛生兵の仕事も実体験し、ひるむことなく負傷者の手当でもできるようになるばかりでなく、武器にも興味を示し、M-16のメカニズムとその使用法も習得してしまう。彼女の変化について、Bates は、“By conventional criteria she becomes more ‘masculine.’ The masculine traits are merely symptoms, however, of her fascination with war and particularly with the jungle.” とコメントする(155)。兵士たちのセックスシンボルであった Mary Anne の行動のこのような「男性化」は、彼女の肉体的変化にも反映されていく。彼女は化粧をやめ、アクセサリーもつけず、金髪も短く切る。更には、彼女の肉体は女性的な柔軟さを失って筋肉質となり、声さえも低くなり、夕刻には時々だまりこんで闇を見つめるようになる。そして遂には Green Berets と行動を共にし、ambush に参加して朝帰りすることになる。

このように Mary Anne が Mark の支配を離れて自律的に行動するようになると二人の間の“love”が変質してくる。彼女が抱いていた結婚に対するロマンティックな夢も、以前ほどの具体性やこだわりをもつことはなく、最終的に彼女は Mark と結婚するつもりではあるものの、結婚前にテスト期間をおこうと提案するに至り、彼は“uncomfortable”と感じるようになる(110)。自分に従属しなくなった Mary Anne を何とかもう一度支配しようと Mark は焦り、Mary Anne が ambush に参加した翌日、彼女と婚約を交わす。しかし、二人は肉体的に一緒にいてもどこかよそよそしい気分になる。

Over the next several days there was a strained, tightly wound quality to the way they treated each other, a rigid correctness that was enforced by repetitive acts of willpower. To look at them from a distance, Rat said, you would think they were the happiest two people on the planet A model of togetherness, it seemed. And yet at close range their faces showed the tension. Too polite, too thoughtful. (114)

“The Things They Carried” の Martha が Jimmy に対して抱いていた気持ちが “separate-but-together quality” であるなら、Mary Anne と Mark の間にあるのはそれとちょうど反対の極である “together-but-separate quality” とでも表される気持ちだろう。

興味深いのは、ちょうど Mary Anne の「男性化」に反比例する、パートナー Mark Fossie の「女性化」である。Mary Anne が何も言わずに ambush に参加し、一晩中もどらなくなると、Mark は彼女が他の兵士と浮気していると誤解し、Rat Kiley に泣きついてくる。

Abruptly then, Fossie seemed to collapse. He squatted down, rocking on his heels, still clutching the flashlight. Just a boy—eighteen years old. Tall and blond. A gifted athlete. A nice kid, too, polite and good-hearted, although for the moment none of it seemed to be serving him well. (111)

これ以降の Mark は完全に Mary Anne に振り回される。彼は彼女から婚約を取り付け、アメリカへ彼女を帰すことを決め、彼女もそれに同意するが、彼女は結局彼のもとを去る。Mark は最後に Green Berets の小屋にいる彼女を探し、見つけるが、おそらくは自分が殺したと思われる Viet Cong の舌をつないだネックレスをつけた彼女の語る言葉に返す言葉もなく、立ち上

がることさえできない全くの腰抜け状態となる。

Lorrie Smith は、この話が語り手 Tim O'Brien によるものではなく、あまり信用のおけない story-teller である Rat Kiley が語ったことを語り手がまた聞き形で書き留めるというこの話の体裁上、また、最終的に Mary Anne が人間社会の域外へ姿を消してしまうという結末ゆえに、Mary Anne は主体性を持ったヒロインとはなり得ず、“a sort of macabre, B-movie ‘joke,’ good for a nervous laugh among the men” でしかないと指摘する。そして Smith は、Mary Anne の怪物的変化は、彼女のことを語り草にする Rat Kiley や Tim O'Brien たち “the more ‘normal’ soldiers” の結束を強める機能しか持たず、結果的にこの話もまた女性を語りのサークルから “exclude” するものであると論じる (36)。

しかし、作者 O'Brien は、この話においても、女性を exclude しようとするのではなく、逆に女性を include しようという意図をもっていると思われる。まず、Steven Kaplan とのインタビューの中で Mary Anne や *The Nuclear Age* の Sarah Strouch のような女戦士を通して男の世界の性質についてコメントしようとしているのかという質問に対し、O'Brien は肯定し、次のように続ける。

I'm a man, and I write about things. I often write about war, and war in our culture has been historically a man's milieu. Yet it seems to me that it is unfair to half of the population to unnecessarily exclude female participation in male events. It would be more fun, it would be more instructive, it would be more artistic, more beautiful, to include as much as possible the whole of humanity in these stories. Also, it's interesting to test in one's imagination, almost as one would test a hypothesis, the actions and reactions of a female heart to situations to which they are not accustomed. (98)

更に、McNerneyとのインタビューでは、O'Brienは“The Sweetheart of the Song Tra Bong”が、“an utterly feminist story”であると言い、次のように述べる。

It seems to me to be saying, in part, if women were to serve in combat they would be experiencing precisely what I am, the same conflicts, the same paradoxes, the same terrors, the same guilts, the same seductions of the soul. They would be going to the same dark side of the human hemisphere, the dark side of the moon, the dark side of their own psyches. (21)

O'Brienの考え方は、“The Sweetheart of the Song Tra Bong”の主な語り手Rat Kileyの言葉にも反映される。

“... What's so impossible about that? She was a girl, that's all. I mean, if it was a guy, everybody'd say, Hey, no big deal, he got caught up in the Nam shit, he got seduced by the Greenies. See what I mean? You got these blinders on about women. How gentle and peaceful they are. All that crap about how if we had a pussy for president there wouldn't be no more wars. Pure garbage. You got to get rid of that sexist attitude.” (117)

Ratの言うとおりに、この話が“impossible”に感じられるのは、ここで“the Nam shit”にとり憑かれて変貌するのが女性だからであり、これが男性であれば“no big deal”となる。しかし、それは通常女性が兵士として戦場に赴くことがほとんどないために、女性は“gentle and peaceful”な存在であるとする先入観に基づく感覚であり、実際に女性も戦場へ行けば男性と同様に“the same dark side of the human hemisphere, the dark side of the moon, the dark side of their own psyches”を体験し、変

貌する可能性があるのではないか、という仮説を、この物語は提示する。「男性化」した Mary Anne ではあるが、Mark や Rat によって最後に目撃されたとき、彼女はスカートとブラウスという女性の服を身につけ、高い声で歌い、人間の舌という無気味なものに形を変えたとはいえ、いったんははずしたアクセサリーを再び身につけている。その姿は、如何に「男性化」したとはいえ、彼女の性別が依然として「女」であるということを象徴的に物語り、変貌した彼女は男性ではなく紛れもない女性であると読者に再認識させる。Rat の言葉に対し、女性の読者が不快感を感じたとすれば、それはその読者自身が、女性とは “gentle and peaceful” な性であり、戦場へ行っても決して人殺しなどはしないという “blindness” を疑うこともなく持っているということであり、その意味ではその読者の態度こそは性に対する偏見や幻想を持った “sexist attitude” ということになるだろう。

この話でも、“The Things They Carried” で見たのと同様、O’Brien は、男性のヒロイズム神話を破壊すると同時に、女性とはこうであるという幻想をも破壊する試みを行っている。O’Brien が *Going After Cacciato* の Sarkin Aung Wan を “an example of a hero” と呼んだことは前述したが、同じインタビューで、困難にあっても高潔に振る舞う彼女と Mary Anne Bell を比較する。

Mary Anne Bell in “Sweetheart of the Song Tra Bong” doesn’t act so nobly or well. She acts as others would act. She’s seduced by it. But the capabilities of one woman, to act just as men, sometimes respond this way, other times this way, is to show that women too can succumb to violence. (McNerney, 22)

Mary Anne Bell は、ヒーロー幻想を破壊するが、ヒーローとはなり得ない。彼女は Mark Fossie や Jimmy Cross や他の兵士たち同様、ベトナム戦争

に関する知識もなく戦地へ赴くことへの意味を自問することもなく、ただ戦争の現実に触れることにより、性や国籍、年齢、学歴などによって今まで自分を既定していた幻想を剥ぎ取られただけのことである。この話は、男であれ女であれ、幼稚な幻想に振り回され自己の信念やアイデンティティを持たぬまま戦争の厳しい現実と直面したナイーブな若者が、平和なアメリカ社会から引きずって来た幻想や仮面を剥がされる過程を描き出している。

c) Kathleen

Kathleen は、語り手 Tim O'Brien の 9 才（途中で 10 才になる）の娘である。彼女は Martha や Mary Anne のようにある話の中心的存在になることはなく、その意味では周辺的な脇役だが、戦争を語ろうとする現在の 43 才の語り手に意見し、彼と行動を共にする唯一の登場人物として注目すべきであろう。Kathleen は最初 “Spin” に登場し、戦争の話を書く父親に、それは “obsession” だからもっと他の楽しい話題について書くべきだと進める (38)。次に彼女が登場するのは “Ambush” で、戦争の話ばかり書いているのだからあなたはだれかを殺したことがあるのでしょうかと父に言い (147)、“Good Form” でも同じ質問をする (204)。“Field Trip” では、Kathleen は 10 才の誕生日のプレゼントとして父のベトナム行きに同行する。実際の作者 O'Brien には子供はいない。また、O'Brien が戦後再びベトナムへ行くのは 1994 年彼の当時の恋人 Kate を同伴してのことであり、*The Things They Carried* を発表した時点では彼はまだ戦後のベトナムへは足を踏み入れていない³。ここでは、“Field Trip” を中心に、Kathleen という架空の少女と、彼女を伴った架空のベトナム旅行の意義を考えてみたい。

“Field Trip” では、語り手 O'Brien は娘の Kathleen とともに、戦争中 Kiowa が排泄物のぬかるみに埋没した場所を訪れ、Kiowa の遺したモカシンを泥の川に流す⁴。戦後 20 年を経た語り手がこの地に降り立ったとき、かつて自己の友人も誇りも自信も、多くを呑み込み、“all the waste that was

Vietnam, all the vulgarity and horror” を具現してきたと彼が思い続けたこの地が、今は嘘のように平穏で、“Flat and dreary and unremarkable” と感じられ、感情が湧いてこない (210)。ここで注目すべきは、語り手が、自分がかつて兵士として戦い、以後もトラウマとして自分を眠れなくしたこの地を娘に見せることが妥当であると考えたから娘をここにつれて来たと言いつつ、ここへ来た目的、自分の感情などの詳細を一切娘には明らかにせず、それゆえ娘もそれらのことを全く理解しないということである。娘にとって戦争は「穴居人や恐竜と同じくらい遠い」昔の話であり、彼女なりの常識に基づいていろいろと質問をしても理屈の通った答えをしてくれない父親の言動は“weird” 以外の何ものでもない (208-09)。観光名所を廻っていたときは興味を示した彼女も、この地に来ると退屈し、早く立ち去ろうと父を促す。最後の場面では、畑仕事をしていた暗い顔の農民のひとりが、語り手に向かってシャベルを頭上に振りかざすのを見た Kathleen は、その農民が怒っているようだと言うが、語り手は否定し、“All that’s finished.” と答えてこの話は終る (213)。

一見すると“Field Trip” のベトナム行きは、Kiowa の遺品を彼が死んだ地へ還して別れを告げるとともに、自らの戦争の思い出へも訣別しようという語り手の自己満足のための旅行であり、Kathleen は単なる同行者にすぎず、戦争は彼女からは完全に遮断されたもののように見える。そして最後の“All that’s finished.” という言葉からは、娘の鋭い直感を否定し、この住民たちがどういう感情を持とうと、自分たちが戦時中彼等に対して与えた苦痛には眼をつむり、目的を達成したらさっさと国へ帰ってつらい過去は忘れようという無責任な態度が感じられる。確かに“Field Trip” を単独で読めば、これは語り手の単なる自己満足の話で終わってしまう。しかし、*The Things They Carried* 全体の中で考えると、別の読みができる。

Mark Heberle は、“Field Trip” をその前の“Good Form” の章と関連づけて考える。“Good Form” で語り手は、体験した事実をありのままに

伝える “happening-truth” と物語として invent された “story-truth” を区別し、自分は43才の作家で昔 Quang Ngai Province で一兵卒だったことはあるが、*The Things They Carried* 中のその他のことはほとんど後者であり、作り話であると述べる。そして、読者に feeling を伝えるという点で、“story-truth” は時に “happening-truth” よりも “truer” であると語る (*The Things They Carried*, 203)。Heberle は、この章のすぐあとに “Field Trip” のエピソードを置いて、読者にこのエピソードの “authenticity” を疑わせることにより、再びかつての戦地に足を踏み入れることで Kiowa の死にまつわる “traumatic experiences” に終止符を打ったと語る表層の語りとは裏腹に、実はこのような “traumatic experiences” を決して読者にそのままの形の “happening-truth” として伝えることができないということ (“ineffability”) を表しており、それ故語り手は戦争の話をここでやめることなく語りつづけるのだと述べる (Heberle, 211)。彼の指摘は妥当である。“Good Form” を読んだ読者は、“Field Trip” が、“happening-truth” ではなく、「自分に娘がいて、共にベトナムへ戻ったとしたら」というひとつの仮説の上に立った “story-truth” ではないかと感じる。そして、“All that’s finished.” と過去のトラウマへ訣別を告げる結びをここに置きながら、*The Things They Carried* がここで終ることなく続くということからも、逆説的に、実は何ごとも終ってはいない、という作者の深層の声を反映していると読める。

それでは、Kathleen の役割は何であろうか。現実には子供のいない O’Brien によって作り出されたこの架空の娘は、特定の個人ではなく、不特定の未来を担う来るべき世代すべてを代表すると解釈してもいいだろう。しかし、この作品には、未来の子供達に対する明白なメッセージはない。“Field Trip” に限らず *The Things They Carried* の他のところでも Kathleen は語り手に、戦争について意見や質問をするが、語り手は戦争について多くを答えることがない。O’Brien のヒロイズムについての考え方を

振り返ってみると、従来の John Wayne 型ヒーロー幻想を挫折させる彼の作品の中で、語り手が子供に自分の武勇談を聞かせるという舞台設定は最も不適切であろうと思われるが、そうでなくても例えば子供に真のヒロイズムとは何かと父親が説教したとしても、それは10才になったばかりの少女の理解の域を越えるものだろう。語り手が今は何もコメントすることなく、自分にとって“all the waste that was Vietnam, all the vulgarity and horror”を具現する場所に彼女を伴ったのは、将来彼女が長じて自分の意志を持ち判断力を身につけたとき、このときのことを振り返り、父の戦った戦争を自分なりに解釈し、また新たな戦争が起こったときにも自分なりの信念に基づいた“courageous”な行動をとることができるように、わざと自分の意見の押し付けを控えたのではないか、と考えられる。

次に、作者が想像上の子供を息子ではなく娘に設定したという点を考えてみよう。今まで見てきたとおり、O'Brien は従来のヒーロー神話を覆してきた。そして、自分の戦争の話を、自分と同じような体験をした復員兵よりもむしろ同じ体験をすることができない人々が読んで感動することに喜びを感じると語る。以上のことから、彼が戦争の話を語り伝え、自分が兵士として戦った場所に同行させる子供として、兵士となる可能性のある息子ではなく、将来的に戦争を体験できないであろうと思われる娘を設定したのは自然であろう。

最後に、Kathleen の9才という年齢について考えてみる。この年齢は、子供時代が終り、思春期が始まる境目である。この頃までの子供は、周囲からそれぞれの性に応じた育てられ方をすることはあっても、肉体的にはまだ asexual であり、体力的にも男女の性差を意識することは少なく、ジェンダーにまつわる偏見や幻想を頭の中に抱いてはいてもそれに基づいた行動をとることはまだできない。Kathleen がこのような男女の分岐点の年齢に設定されているということは、性概念の脱構築を行う作品全体のトーンと呼応している。一生戦場に赴くことがないかもしれない Kathleen を昔の戦場に伴う

ことにより、今後彼女が肉体的に女性となっても、従来の性概念に振り回されず、自己の判断に基づいて行動してほしいという語り手の、ひいては作者の願いが込められていると考えてもよいだろう。

9才という年齢に関して今一つ注目してもいいことは、この作品の最後の“The Lives of the Dead”のLindaもまた同じ9才であるという点である。Lindaは語り手がTimmyと呼ばれていた幼少期のガールフレンドであるが、9才のときに脳腫瘍で死んでしまう。彼女は死後、Timmyの前に現れ、二人の間に次のような会話がある。

“Well, right now,” she said, “I’m not dead. But when I am, it’s like...I don’t know, I guess it’s like being inside a book that nobody’s reading.”

“A book?” I said.

“An old one. It’s up on a library shelf, so you’re safe and everything, but the book hasn’t been checked out for a long long time. All you can do is wait. Just hope somebody’ll pick it up and start reading.” (273)

このあと、語り手は、次のように語る。

And then it becomes 1990. I’m forty-three years old, and a writer now, still dreaming Linda alive in exactly the same way.... Her real name doesn’t matter. She was nine years old. I loved her and then she died. And yet right here, in the spell of memory and imagination, I can still see her as if through ice, as if I’m gazing into some other world, a place where there are no brain tumors and no funeral homes, where there are no bodies at all. (273)

Lindaは、語り手の“spell of memory and imagination”によって

Kathleenとして蘇ったのかもしれない。そして、Kathleenのことを書いた *The Things They Carried* もまた、図書館に保管され、大人になった Kathleen のような女性に読まれることになるだろう。そのとき、この女性は、語り手と Kathleen のベトナム旅行の意義を自分なりに考えることになるのかもしれない。

結語にかえて

本論文を執筆中、2001年9月11日、アメリカ合衆国はテロリストの攻撃を受けた。ハイジャックされた4機の旅客機がアメリカ経済の象徴である世界貿易センタービルツインタワーと軍事拠点である国防総省に激突（1機は墜落）、数千人の命が奪われた。数々の戦争によって超大国にのし上がったこの国が直接攻撃されたのは、1941年日本軍による真珠湾奇襲攻撃以来であるが、本土においてこれほど多くの罪のない民間人の血が流されたのは史上初めてのことである。この攻撃を受け、George Bush (Jr.) 政権は、テロの首謀者を Osama bin Laden 氏と特定し、彼が潜伏していると目されるアフガニスタンへの報復攻撃を準備中である。国民の多くが報復攻撃には賛成である。湾岸戦争のときと同様に、世界の悪から民主主義を守るという大義のもとに、「強いアメリカ」が復活した。“John Wayne Syndrome” が再び頭をもたげ、Susan Jeffords の言う “remasculinization of America” がまたしても行われつつある。

9月20日の *The New York Times* は、この事件のために、現在執筆中の作品を見直すことになった小説家たちのことを記事にしている。“Novelists Reassess Their Subject Matter” と題する Dinitia Smith のこの記事によると、Tim O'Brien は、“Vietnam was not just a temporal thing Vietnam is always with us, the Trojan War is always with us, World War II.” と述べ、現在執筆中の “July, July” という作品の中で “God” をマイナーな登場人物として取り扱っていたが、この事件以降、ひとつの章

全体を“God”に充てることに決めたと言っている。記事にはまた、次のように書かれている。

Mr. O'Brien spoke of the writer's prophetic powers, invoking the figures of Cassandra and Sophocles. "I feel I've been writing about Vietnam all these years," he said. Now, "we are really there."

ベトナム戦争とこの報復攻撃を関連づける声は少ない。敵であっても無実の民間人の血を流してはいけないという声もあるが、少数派である。O'Brienにとって“Vietnam”が象徴するものとは、基盤となる自己の判断力を欠き、幻想に惑わされ、或いは周囲の風潮に流されて戦争に行くという、実は“cowardice”の行為である。今現在、何千もの罪もないアメリカ人の命を奪ったテロ組織とその支持者を壊滅すべく、“Whether we bring our enemies to justice or bring justice to our enemies, justice will be done.”という大統領の言葉に煽られ、“justice”の意味を深く問うこともなく、多くの若者が“enemies of freedom”を根絶する試みに賛同し、ある者は兵士に志願する（“President Bush's Address on Terrorism Before a Joint Meeting of Congress”）。ヒーロー幻想の復活である。このような幻想のヒーローの頂点に立って彼等を統率するのが幻想の“God”であり、幻想の“God”の幻想の“justice”が政治に利用されると戦争となる。幻想の“justice”どうしが衝突し、犠牲となるのはいつも罪のない民間人である。

今回の事件でアメリカのメディアは、貿易センタービルの惨状を「戦場」と比喩し、Bush大統領は、この攻撃は戦闘行為に当たり、アメリカをそのような暴力から防衛するためには武力で立ち向かう他はないという論理を導き出す。何故アメリカが攻撃されたのか、何故アメリカの行うことはすべて“justice”で、それに反対するものはすべて「悪」となるのか、問われ

ることはほとんどない。今回の事件を「戦争」と捉えるアメリカ人の多くは、現実に戦争を体験したこともなく、実際の戦場で迫り来る死の恐怖にも曝されたことのない民間人である。アメリカ合衆国という国家は、巧妙にも、自国の領土を離れた土地に「悪」を造り出し、自らは正義の味方となって国民の視野の外へ戦争を輸出することにより、国民の「戦争」感覚を麻痺させてきた。O'Brienが望むように、このような、戦争を直接体験できない人々に、彼の作品の声が少しでも届くことを望む限りである。

註

- 1) *The Things They Carried*の語り手は、作者と同名であるが、作者と同一視されるべきではない。作者と語り手の距離については、Herzog, 1997, 113-15参照。
- 2) O'Brienは、ベトナム人の立場に立ったベトナム戦争文学はベトナム人作家の手に委ねるのが妥当であると考えている (Kaplan, 104, McNerney, 17)。
- 3) Heberleは、“Field Trip”のKathleenは、1994年実際に恋人Kateを伴ってベトナムに行ったときのことをもとにしたO'Brienのエッセイ“The Vietnam in Me”におけるKateに、名前も役割も類似していると指摘する (32)。確かに、KathleenはKateをモデルにしているのかもしれない。
- 4) Penguin版では語り手が川に流すのは“moccassins”であるが、初版のHoughton/Seymour Lawrence版では“hatchet”となっている。

参考文献

- Bates, Milton J. *The Wars We Took to Vietnam: Cultural Conflict and Storytelling*. Berkeley: Univ. of California Press, 1996.
- Christopher, Renny. *The Viet Nam War/The American War: Images and Representations in Euro-American and Vietnamese Exile Narratives*. Amherst: Univ. of Massachusetts Press, 1995.
- Friedan, Betty. *The Feminine Mystique*. 1963. New York: Norton, 1997.
- Gustainis, J. Justin. *American Rhetoric and the Vietnam War*. Westport: Praeger Publishers, 1993.
- Heberle, Mark A. *A Trauma Artist: Tim O'Brien and the Fiction of Vietnam*. Iowa City: Univ. of Iowa Press, 2001.
- Herzog, Tobey C. *Vietnam War Stories: Innocence Lost*. New York: Routledge, 1992.

- . *Tim O'Brien*. New York: Twayne, 1997.
- Jeffords, Susan. *The Remasculinization of America: Gender and the Vietnam War*. Bloomington and Indianapolis: Indiana Univ. Press, 1989.
- Kaplan, Steven. "An Interview with Tim O'Brien." *Missouri Review* 14.3 (1991): 93-108.
- Kovic, Ron. *Born on the Forth of July*. New York: Pocket Books, 1976.
- McNerney, Brian, C. "Responsibly Inventing History: An Interview with Tim O'Brien." *War, Literature, and the Arts* 6.2 (Fall 1994): 1-24.
- Naparsteck, Martin. "An Interview with Tim O'Brien." *Contemporary Literature* 32.1 (1991): 1-11.
- O'Brien, Tim. *Going After Cacciato*. 1975. New York: Delta/Seymour Lawrence, 1989.
- . *If I Die in a Combat Zone, Box Me up and Ship Me Home*. 1973. London: Paladin Books, 1990.
- . *The Nuclear Age*. 1985. New York: Dell, 1993.
- . *The Things They Carried*. 1990. New York: Penguin, 1991.
- . "The Vietnam in Me." *The New York Times Magazine* 2 October 1994: 48-57.
- "President Bush's Address on Terrorism Before a Joint Meeting of Congress." *The New York Times* 21 September 2001. Online. 22 September 2001.
- Smith, Dinitia. "Novelists Reassess Their Subject Matter." *The New York Times* 20 September 2001. Online. 24 September 2001.
- Smith, Lorrie N. "'The Things Men Do': The Gendered Subtext in Tim O'Brien's *Esquire* Stories." *Critique* 36.1 (Fall 1994): 16-39.
- Tal, Kali. *Worlds of Hurt: Reading the Literatures of Trauma*. Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1996.